汲古選書 8

明清文学論

船津富彦 著

汲古選書 8

明清文学論

船津富彦 著

著者略歴

船津　富彦（ふなつ　とみひこ）

1915年5月11日，埼玉県鳩ヶ谷市に生まれる。
早稲田大学高等師範部卒。元東洋大学文学部教授，広島大学・名古屋大学・高知大学・愛知教育大学・早稲田大学・駒沢大学講師。
主　著　『中国詩話の研究』『唐宋文学論』『謝霊運』
現住所　〒177　東京都練馬区上石神井2の21の8

明清文学論
平成五年六月　発行

著　者　船津富彦
発行者　坂本健彦
印刷所　中台整版

発行所　汲古書院
一〇二　東京都千代田区飯田橋二―五―四
電　話〇三（三二六五）九七六四
FAX〇三（三二二二）一八四五

汲古選書8

©一九九三

ISBN4-7629-5008-4　C 3398

はじめに

中国文学のジャンルの中で、極めて重要な意味を持つものに文学論の流れがあるが、従来あまり注目されず、わずかに専門家によってコツコツと研究が試みられてきたにすぎない。然し文学論は作品の根底に深く内蔵され、逆に言えばそれを母体として作品が生み出されており、一般の鑑賞者もそれをするどく感知することによって、深味を増すことができる甚だ大切なものである。それ故、世界に誇る古い歴史を持ち、優秀な作品を数々残して来た中国の文学でも多くの独自の文学論が自然と生み出された。それは将に百花開きつつ、変ってきたといってよい。そして、たんに中国本土のみならず、漢字の恩恵を受けた、いわゆる漢字文化圏の朝鮮・日本・ベトナム等の文化にも大きな影を落していることを忘れてはならない。

さて、この中国の文学論の流れのうち大きな山の一つとして、明代から清代にわたりそれぞれの時代の文学に指導的役割をもった理論が種々賑やかに唱えられ、生み出されて来たことは大いに刮目されねばならない。

勿論、政治的には明は漢人の王朝であり、清は異民族の満人の王朝であるが、その文化の創作を担ったのは古くから中国本土に住していた漢人である。それ故、漢人社会のもとで漢人特有の思考と表現によって創作された文学論の流れは、王朝を異にしても、途切れることなく続いていったのである。

漢人は古代から黄河を中心として文化を生み続け、唐から宋にかけては世界にもまれな詩の文化を生み出すに至った。且、文学論も中世のそれを受けつぎながら展開したことは、すでに多くの学人にも指摘され、筆者も『唐宋文学論』（汲古書院刊）でその一部について論じた通りである。宋末から元にかけて、この流れは異民族蒙古の進入により一時とだえてしまったが、不屈の民族魂を持つ漢人は再び蒙古族を北方の草原に追い払い、揚子江のほとり、今の南京に都を建立し、南方文化を結集し、さらに兵を進め、やがて元の都である大都を北京とし、黄河の北方文化を統一し、ここに独自の文化を生み出す基盤を完成したのである。文学論も多くの知識人が声高にいろいろの主張を自由に唱え、この傾向は明から清へと変ることなく流れていった。その上、庶民階級の勃興で経済的にも豊かになったため、これらの書物が一般にも読まれるようになり、印刷術の盛行は益々その発達発展に拍車をかけた。多くの文学論書が刊行され、それらの一部は室町時代から江戸時代にかけて、遠く海を渡って日本にまで来、多くの日本のインテリに尊重され、愛読され、様々な影響を与えたのである。

これらの明から清にかけての文学論の動きについては、すでに中国や日本の学人によって種々の面から究明が試みられている。代表的なものについては後述の各時代文学論の序説で述べるが、そこに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

記述されたものは各論の表面的観察が主で、その根底に横たわる問題についてはあまり論じられていないようである。

そこで本書では、明から清にかけて生れた文学論を研究する為の根本資料になる詩話について論じ、そのテキストの版本、日本における所在、さらに従来指摘された問題点等について、「明代詩話考」と「清代詩話考」の二章を設けて解説を試みた。将来これらの資料を活用することによって、新しい問題の発掘と展開を試みたい。

明代においてはいろいろな様式の文学作品が創作され、それにしたがって論評も盛んになった。それらの中で、極めて独自の見解を展開した李贄、字でいえば卓吾の文学論が大きく注目されるので、

○李贄の文学批評（東洋文学研究十九号　早稲田大学東洋文学研究会一九七一年刊）＊二一頁所載論文原題

でその記述を試みた。また、

○明代における俗字の意識――明版海篇類管見――（中国語学十四号　中国語学研究会一九六四年刊）

○近世日本における唐詩選ブーム（漢文教室七十六号　大修館書店一九六六年刊）＊六四頁所載論文原題

などで、明人の俗字意識と古文辞派の詩論の日本への影響を指摘し、その特質について考えてみた。

明末から清初にかけてもいろいろの詩論が展開し、多くの問題を提出している。それらの中から特に重要な意味を持ったいくつかの点について、掘り下げてみたのが次の論文である。即ち、

○清初詩話にあらわれた「温柔敦厚詩教也」について（東洋文学研究十七号　早稲田大学東洋文学研究会一九六九年刊）

○王船山の文学思想について（日本中国学会報二十一集　日本中国学会一九六九年刊）　＊一三四頁所載論文原題

○漁洋詩話雑考（東洋学論叢　東洋大学文学部紀要三十三集一九八〇年刊・王漁洋研究論集　山東文芸出版社一九九一年刊周錫山等訳）　＊一八六頁所載論文原題

○随園詩話を巡る二・三の特殊性（東方学　東方学会一九七三年刊）　＊二一三頁所載論文原題

である。

また、明から清にかけて中国文学の世界で忘れてはならないのは、当時の著名な文人によって文語で記述された文言小説類である。その代表的なものについて、そこに含まれる基本的な文学論の考察を試みたのが次の論文である。

○王漁洋の小説論（東洋学論叢　東洋大学文学部紀要三十九集一九八五年刊）

○蒲松齢の小説観（東洋大学アジア・アフリカ研究所紀要　創立三十周年紀念一九九〇年刊）　＊二四八頁所載論文原題

○袁枚の小説論――建前と本音について――（東洋学論叢　東洋大学文学部紀要三十五集一九八二年刊）
＊二七五頁所載論文原題
○紀昀の小説論（未発表）

今回これらの論究をまとめるに当り、問題点を明確に示す目的で題を改めたり、内容にもすこしく手を加えてある。このことにより明清を一つの流れの中に受けとめられるように試みたものである。

尚、口語小説も明・清時代に多くの名作が生れ、これはインテリのみならず多数の庶民にまで愛され、読まれ、そこには極めて素朴な文学論を初め、知識人による高度なものまで生れている。これらについては多くの学者の研究が進められているが、一層深い研究の進むことを将来に望みたい。

明清文学論　目次

はじめに……1
明代文学論……3
明代文学論序説――問題点の所在――……4
明代詩話考……8
李卓吾（李贄）の文学批評について……21
附論1　明代における俗字の意識――明版海篇類管見――……51
附論2　古文辞派の影響――近世日本の唐詩選ブームを追って（唐詩選版本考）――……64
清代文学論……85
清代文学論序説――問題点の所在――……86

清代の詩論

清代詩話考……89
清初詩話にあらわれた「温柔敦厚詩教也」について……112
王夫之　薑斎詩話考――王船山の文学思想――……134
王士禎　漁洋詩話考……186
袁枚　随園詩話考――随園詩話を巡る二、三の特殊性――……213

清代文言小説論

王漁洋の小説論……233
蒲松齢の小説論……248
袁枚の小説論――たてまえと本音について――……275
紀昀の小説論――特に微を中心として――……292
あとがき……307

明清文学論

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

明代文学論

明代文学論序説

——問題点の所在——

強力な騎馬集団で文化栄ゆる中原を武力平定した蒙古民族・元は、遂に現在の北京に都を大都として定め、誇り高き漢民族を約百年にわたって治めた。が、武力による制圧は長く続かず、自然と弱体化していった。

一三六八年正月、安徽省の鳳陽から起った朱元璋（一三二八～九八）は、他のすべての反元グループに先駆けて北京を攻撃し、元の順帝を北方に放ち、国号を明と称した。かくて猛威を極めた元帝国もその年の八月、十代にわたる治世を閉じ、再び漢民族の世になったのである。

その後、一六六四年からは異民族・満人の治世となるが、明の統治の二七七年間、漢民族による王朝は連綿として栄え、その初期は風光の豊かな揚子江の中流、金陵（現在の南京）に都した。後、三代目の永楽帝の時に元の大都を北京として都を移し、金陵を第二の都とした。

この間、漢民族の文化は、南方の江南文化と北方文化とが競いあって発達し、又融合して偉大な明文化を形成し、後世に残した。それは近隣の諸国の文化にも大きな影を落し、特に日本へのそれは見

逃すことの出来ぬものがある。

明代文化の中で文学は、宋・元のそれを伝承しつつ、さらに独自のものを展開した。

まず詩について。

明代の初期、即ち十五世紀の頃は世は太平であった。江南省出身の楊子奇（一三六五～一四四四）、福建省出身の楊栄（一三七一～一四四〇）、湖北省出身の楊溥（一三七二～一四四六）は三楊といわれ、皆、台閣の顕官であったが、その詩はただ太平の世を頌するのみで、豪放の気に乏しかった。後にこのような詩を〈台閣派〉という。当時の詩人にはこれを模倣するものが多く、独自の見解は生れなかった。その結果、詩はくだくだしいものになってしまった。

それに対し十五世紀の後半、湖南省出身の李東陽（一四四七～一五一六）が唐・宋の詩の復興を主張し、十六世紀になると〈古文辞派〉が生じ、「文は必ず秦・漢、詩は必ず盛唐」をスローガンとした。これを尊崇するグループに陝西省出身の李夢陽（一四七二～一五二九）、康海（一四七六～一五三二）、王九思（一四六八～一五五一）、河南省の何景明（一四八三～一五二一）、王廷相（一四七四～一五四四）、山東省の辺貢（一四七六～一五三二）、江蘇省の徐禎卿（一四七九～一五一一）がおり、〈前の七子〉といわれた。主に北方出身者であったが、その詩風と詩論は中国全土に拡がっていった。

このグループの人々が没した十六世紀後半になると、山東省出身の李攀龍（一五一四～七〇）、謝榛

（一四九五～一五七五）、江蘇省の王世貞（一五二六～九〇）、徐中行（一五一七～七八）、宗臣（一五二五～六〇）、江北省の呉国倫（生没不詳）、広東省の梁有誉（生没不詳）などが活躍し、〈後の七子〉といわれる。

この古文辞派の文学は江戸時代の日本にも伝承され、大きな影響を与えたが、その詩風は必ずしも完全なものではなく、やがて一六〇〇年前後になると、湖北省弘安県出身の袁氏三兄弟、宗道（一五六〇～一六〇〇）・宏道（一五六八～一六一〇）・中道（一五七〇～一六二三）を中心に、平易を尊重する〈弘安派〉が生れ、白居易や蘇軾の詩を重視した。又、一六二〇年前後から一六三〇年にかけて湖北省の竟陵出身の鍾惺（一五七四～一六二四）と譚元春（？～一六三一）などが、古文辞派に反撥して非常に奇なる発想と表現を尊重した。彼らはその出身の地名によって〈竟陵派〉といわれる。

以上のように、明代では三百年を通じていろいろと詩風や詩論が変って来た。特にそれまでは官僚を中心として創作され鑑賞されて来たものが、宋代の頃よりの庶民階層の生活が豊かになるといった大きな変動により、庶民が詩の世界でも活躍しはじめ、江南地帯では独自の文化が華開いた。明代における詩の動きについては吉川幸次郎博士の『元明詩概説』（岩波書店刊）が、日本文化に与えた影響については松下忠博士の『江戸時代の詩風と詩論』（講談社刊）が白眉である。又、知識人と庶民作家とが手を組んで、各地に〈詩社〉という結社が栄えたが、これについては横田輝俊氏の『中国近世文学評論史』（渓水社刊）に詳しい。詩風流行のよりどころとなった詩論については、中国では郭紹虞氏

の『中国文学批評史』（一九五五年、新文芸出版社刊）や、羅根沢氏の『中国文学批評史』（一九三四年、北平人文書店刊）が著名であり、日本では、青木正児博士の『支那詩論史』（弘文堂書店刊）や、松下忠博士の『明・清の三詩説』（明治書院刊）の名著がある。

本書では、これらの書ではあまり論じられていない各派の論理の基礎資料となる詩話について、書誌学的立場から論じた。

一方、小説の世界でも、文化の大衆化によって文人以外の人々もその生産や鑑賞に参加し始めた。今迄のような文語による表現の外に、口語によるものが盛んになり、多くの口語小説が記述され、刊行されるようになった。これらは民間に伝承されていた物語を脚色し演変したものが多い。この流れの中で、『三国志演義』『水滸伝』『金瓶梅』『西遊記』『喩世明言』『警世通言』『醒世恒言』などが撰述された。これらは早く日本にも伝来し、大きな影響を与えている。これについて、中国では魯迅の『中国小説史略』（『魯迅全集』所収）があり、日本訳に増田渉氏訳本（サイレン社刊）がある。日本では畏友、前野直彬博士の『中国小説史考』（秋山書店刊）が明・清の小説に詳しい。

特に本書では、独自の小説を展開した李贄、字でいえば卓吾の小説論について、私見を述べてみた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com